



学校だより

12月号

横浜市立大道小学校
令和元年11月30日

学校ホームページ：[横浜市立大道小学校](#)

検索

校長 加藤 和之

「すてきな虫、見つけた！」

寒気がいよいよ厳しくなってきました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

先日、1年生の道徳の授業を観ました。「すてきな虫、見つけた！」という教材文を使った授業でした。

ゆうた君は、朝お母さんに「早くしなさい。また『ぐずぐず虫』が動き出したわね。」と叱られます。学校に行ってから、「どうしてぼくの中には、いやな虫がたくさんいるんだろう。」と下を向きながら先生に言いました。すると先生は、いつも最後までこつこつとやる「こつこつ虫」や、ていねいに手洗いをする「きれい虫」、「にこにこ虫」など、「いい虫」がたくさんいると教えてくれました。ゆうた君は、ぼくの中にはすてきな虫がたくさんいることに気づき、明るい気持ちになりました。

子どもたちは、この授業の中で、自分の中にいる「いい虫」を見つけていました。その姿を微笑ましく見ていたのですが、ふと考えたことがあります。自分が子どもの頃、「こつこつ虫」「きれい虫」といった「いい虫」が自分の中にいることを意識していただろうかと思ったのです。断片的に浮かんでくるのは、「落ち着きがない!」「片付けが下手!」「そそっかしい!」と怒られた記憶だけです。大人になるとなおさらで、自分の「良さ」を意識することは少なくなっています。もちろん「良いこと」もあるのですが、思ったように物事が進まないことばかりが自分の中に残り、「だめだなあ。」と考えることが増えたように思うのです。

しかし、それでも心が折れたり、投げ出したりせずに、こうして元気にやっつけられるのはどうしてだろうと改めて考えてみました。きっとその理由は、やはり子どもの頃にあるのではないかと思ったのです。覚えてはいなくても、「認められた経験」「よくできたね」とほめられた経験（それに近い経験）を積むことができていたのだらうと思います。また無意識のうちに「自分はできる」と手応えを感じるような場面がたくさんあったのだらうと思うのです。そういった経験が「土台」となって、その後の出来事を乗り越えて、今の「ちょっとやそつとじゃへこたれない自分」があるのだと思うのです。

「指導する(叱る)こと」と「ほめること」は逆のこのように見えますが、そのゴールは同じ、その子の「成長」です。ただ、そこに至るまでの道筋が違うのだと思います。将来、たくましく生きていくための土台づくりというように考えると、「○○○虫」のように「ほめられた経験」を子どもにたくさん積み重ねることが大切なのではないでしょうか。私たち大人は、「指導すること」と「ほめること」のバランスを見直すとともに、「ほめてあげる場面を見付ける」「その子の良さを探す」努力をしたいものです。

早いもので、令和元年も残すところあとわずかとなりました。皆様のご理解、ご協力のお陰で、子どもたちは元気に毎日を過ごすことができました。ありがとうございました。皆様、よいお年をお迎えください。